Wizardry®

ウィザードリィ外伝
ギルの迷宮



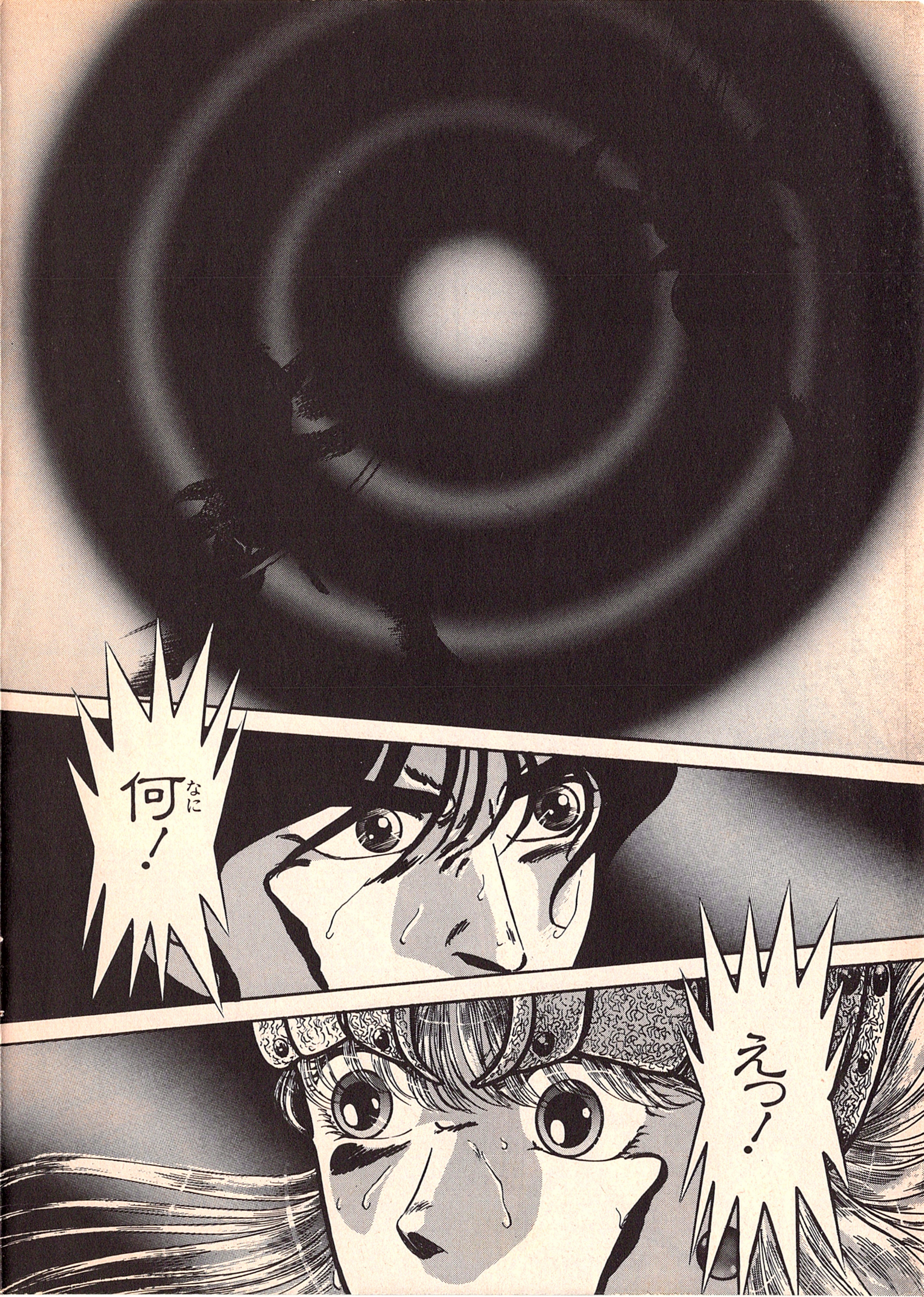
第1話「召喚」

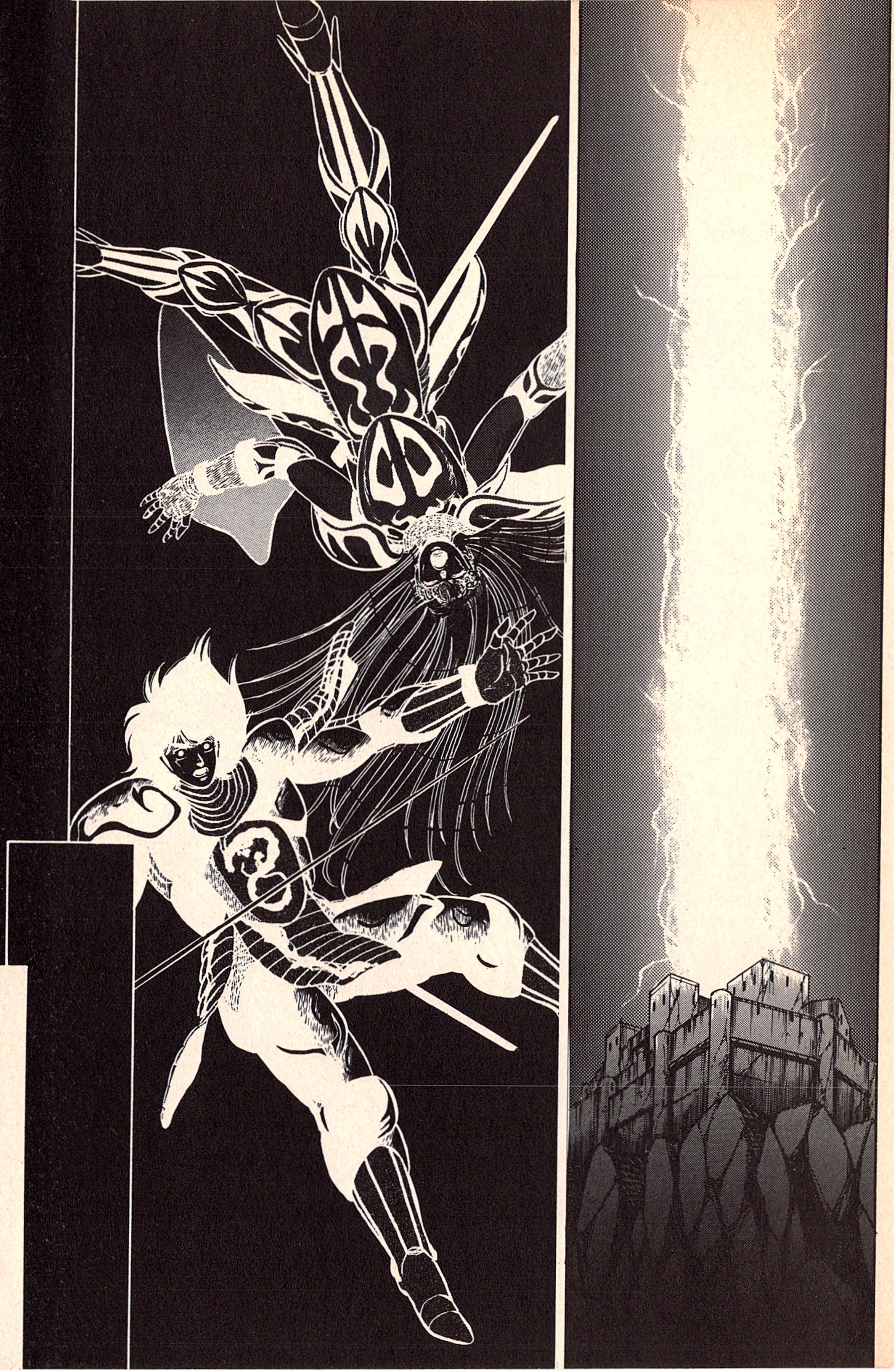
作/石垣環

ホウライ国の若き侍・ショウとリルガミンの姫将軍ルーシィディティの宿命の戦いがまさに始まろうとした瞬間。
２人の身体は突如、奇妙な迷宮へと転移させせられる。そこで２人の見たものは!?


「狂王の試練場」の
時代を溯ること
約一千年
西方の
リルガミン
東方の
ホウライの
二大国家が


大陸の覇権をかけて争っていた時代——
今も国境の砦で戦闘が繰り広げられていた
そして——

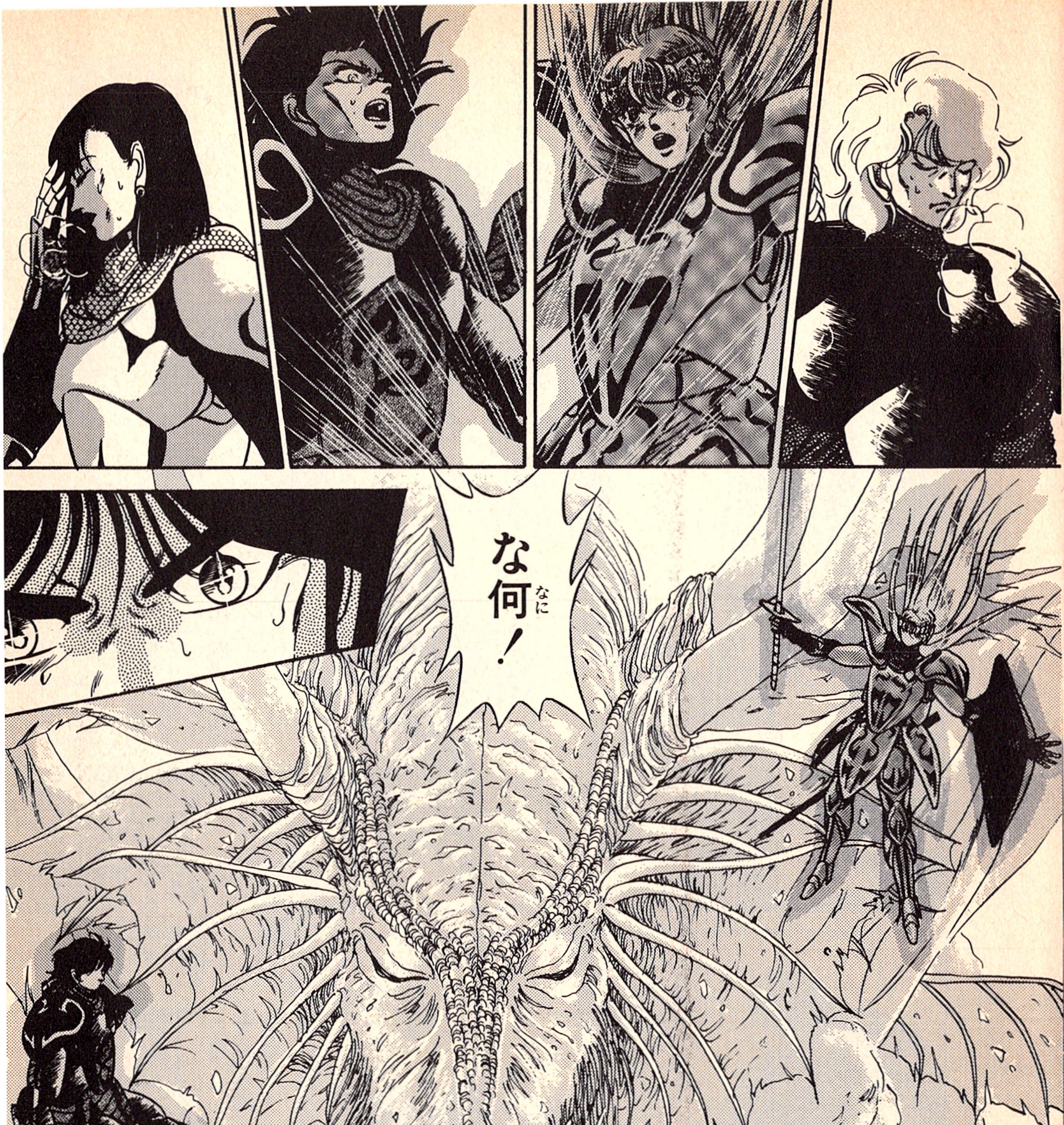

何！
えっ！




くっ……
気がついたか……
シェーラ そっちはどうだ?
じきに目覚めると思うわ
ホラ 言ってるそばから
うっ……
う…ん
ガッ
おっと ここでは仲間割れは御法度だ
仲間?


冗談じゃない
あの女は
敵将――
地上では
敵でも
・・・
ここで
生き延びた
かったら
――
ねえ
何だ?
目が
覚めた
けど……
このオ!
何!

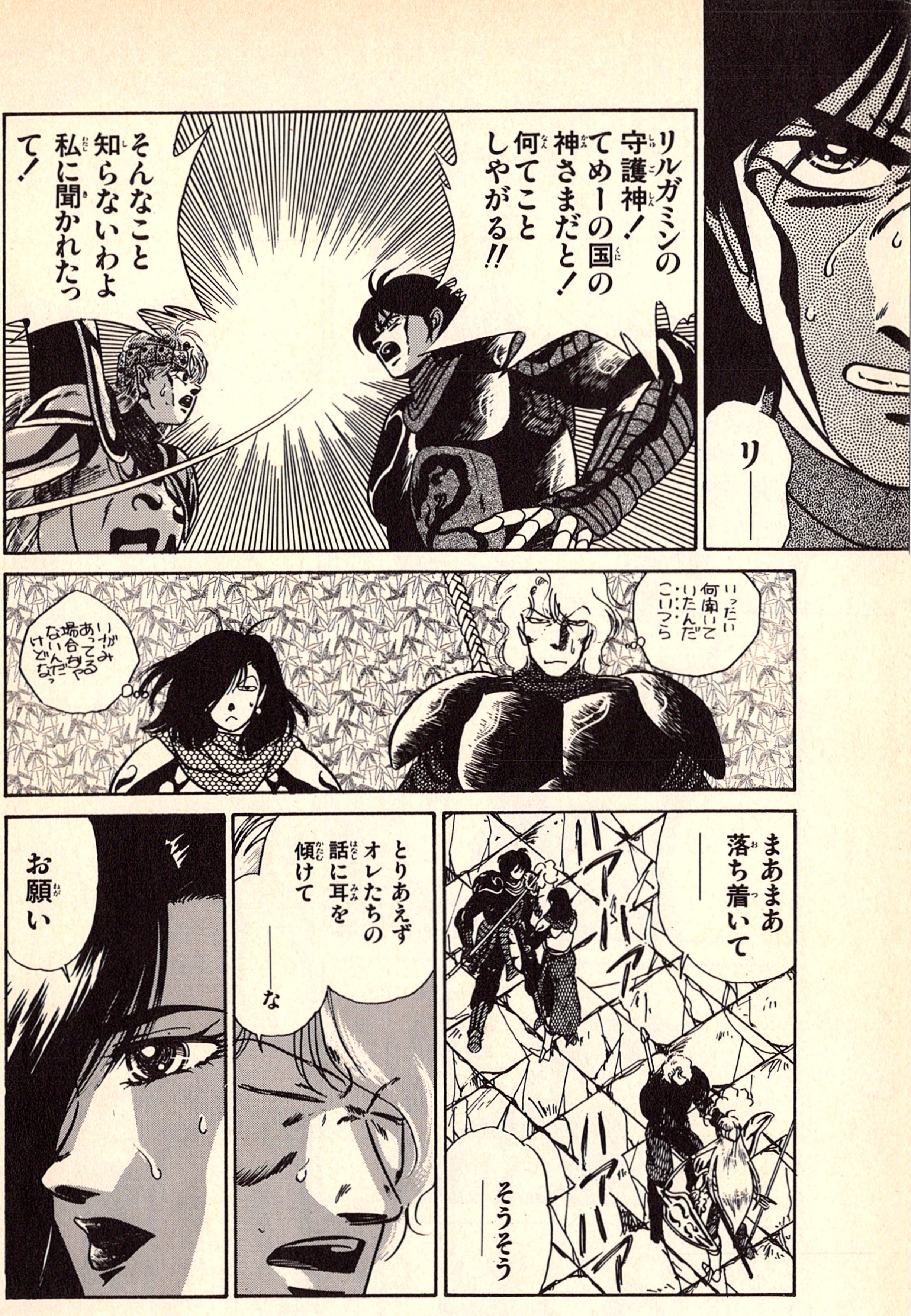

ガキイイッ
その首もらった!!
返り討ちにして——、

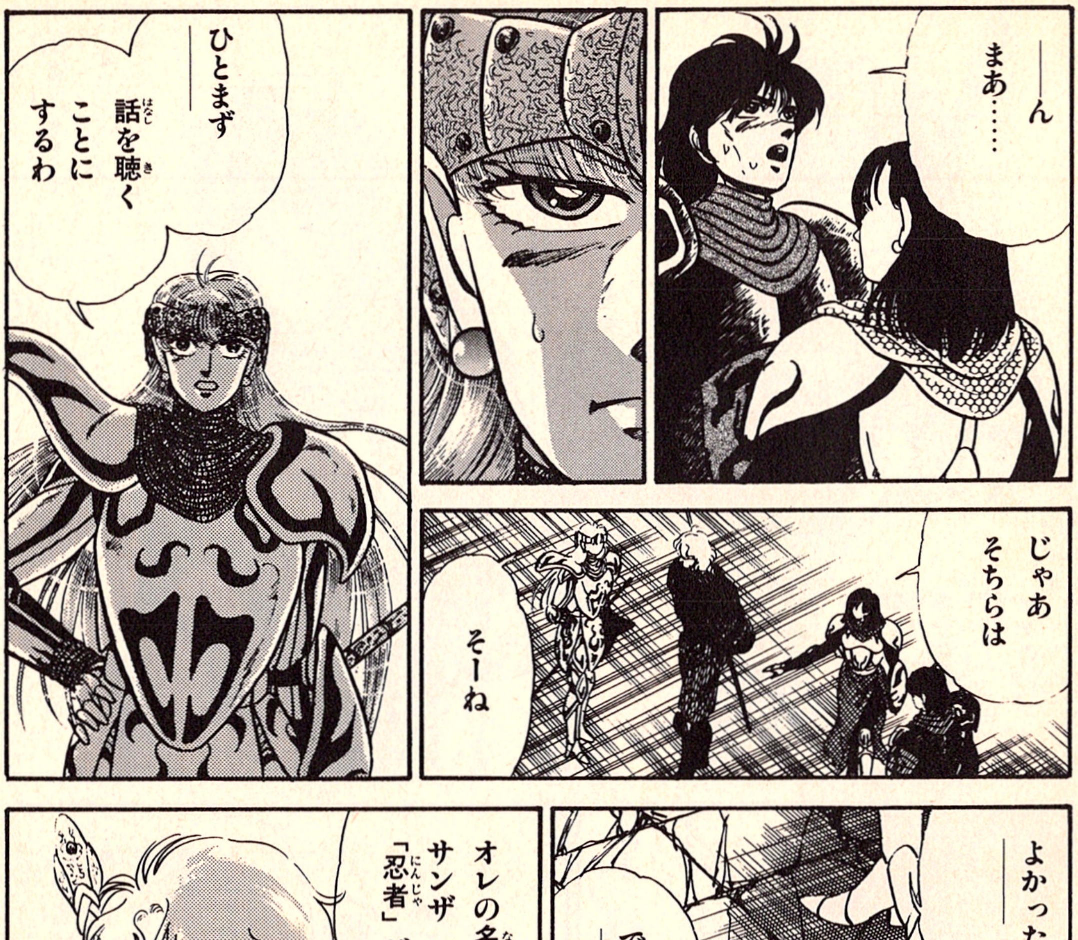


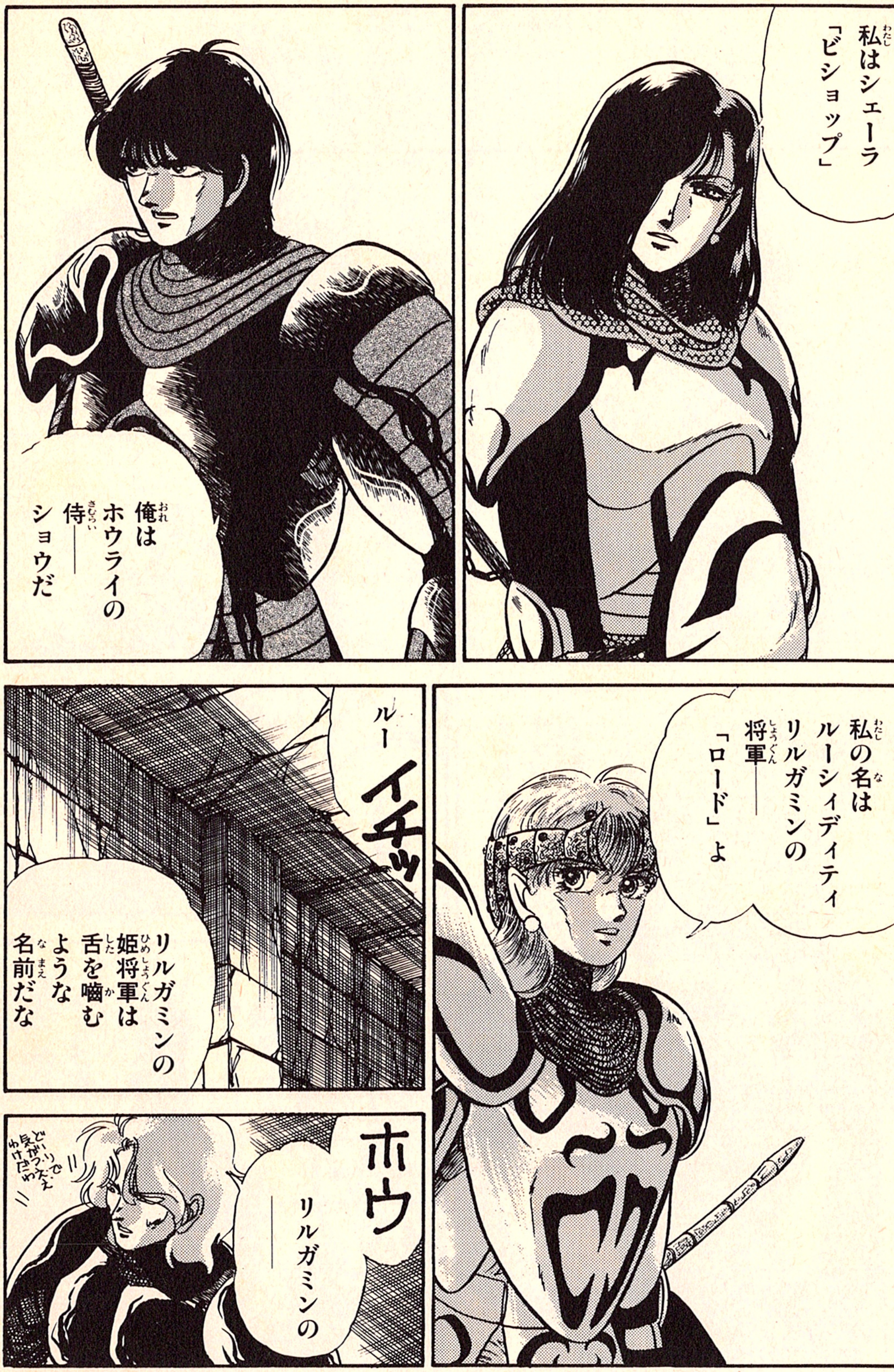
な何（なに）！
えっ！


争うではない
我の選びし
者たちよ
ル――
ル，ケブレス！
ど、どうして――
汝らには
この迷宮にて
なさねば
ならぬことが
ある
この科白
もー何度
聞いたかな
・・・・・
さあ・・・
長いからね
私たち・・・
ギルなる
魔導士が
邪教徒を
率い――
更なることに
邪法を用いて
この世界の
平衡を
乱さんとして
いるのだ


均衡の代弁者たる守護者の使命に目覚め
ギルのなしたる行為を排除せよ
ドッ
ドドッ
な、何だ今のは
さあな
ル、ケブレス
リルガミンの守護神がな、何故?
ほう! あの竜ル・ケブレスって云うんだ・・・・
そーみたいねェ・・・・
スゥゥ
さすれば道は自ずと開かれん

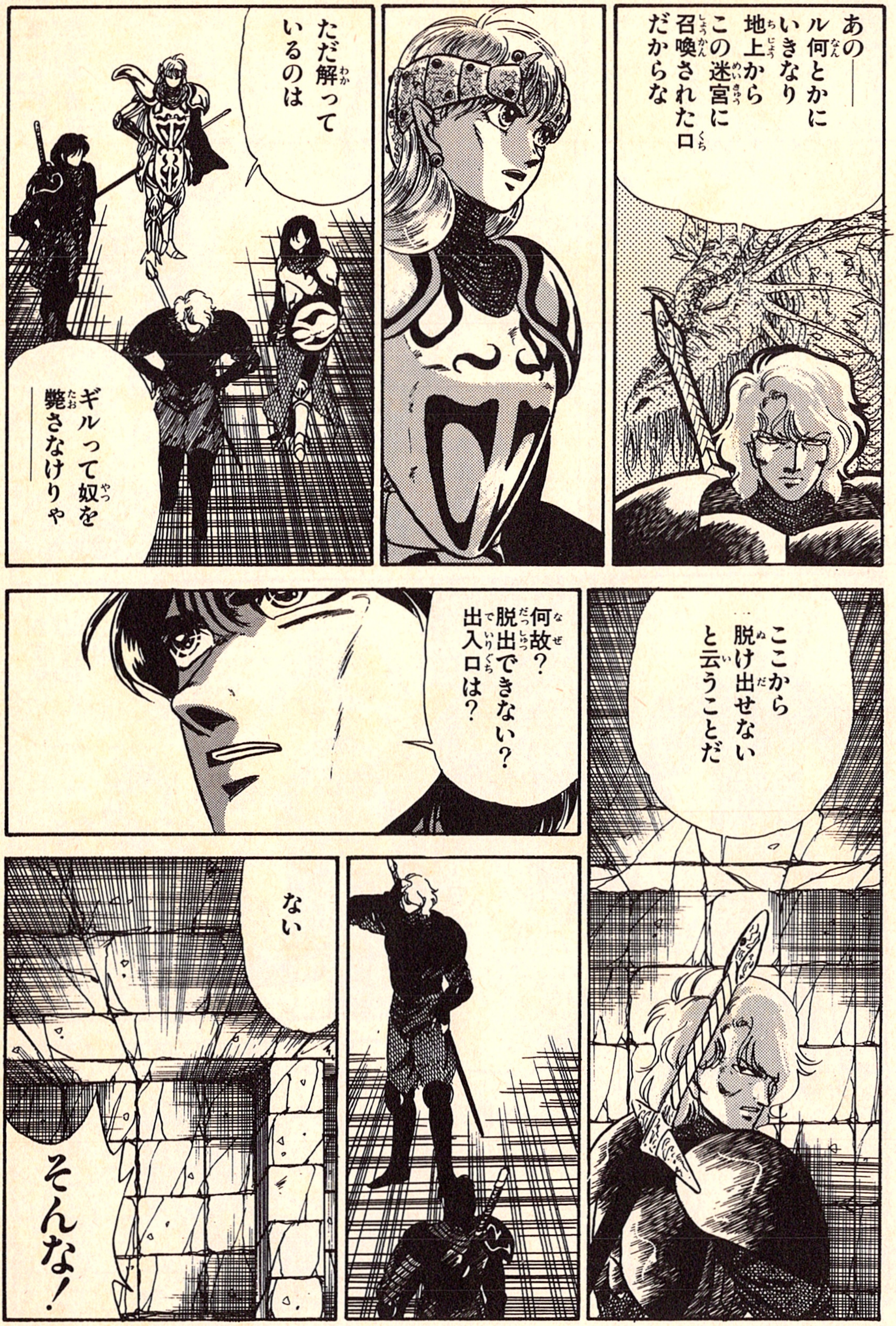

リ——
リルガミンの守護神！てめーの国の神さまだと！何てことしやがる!!
そんなこと知らないわよ私に聞かれたって！
いったい何聞いてたんだ……こいつら
いがみあってる場合ぢゃないんだけどなっ
まあまあ落ち着いて——
——そうそう
とりあえずオレたちの話に耳を傾けて——な
お願い

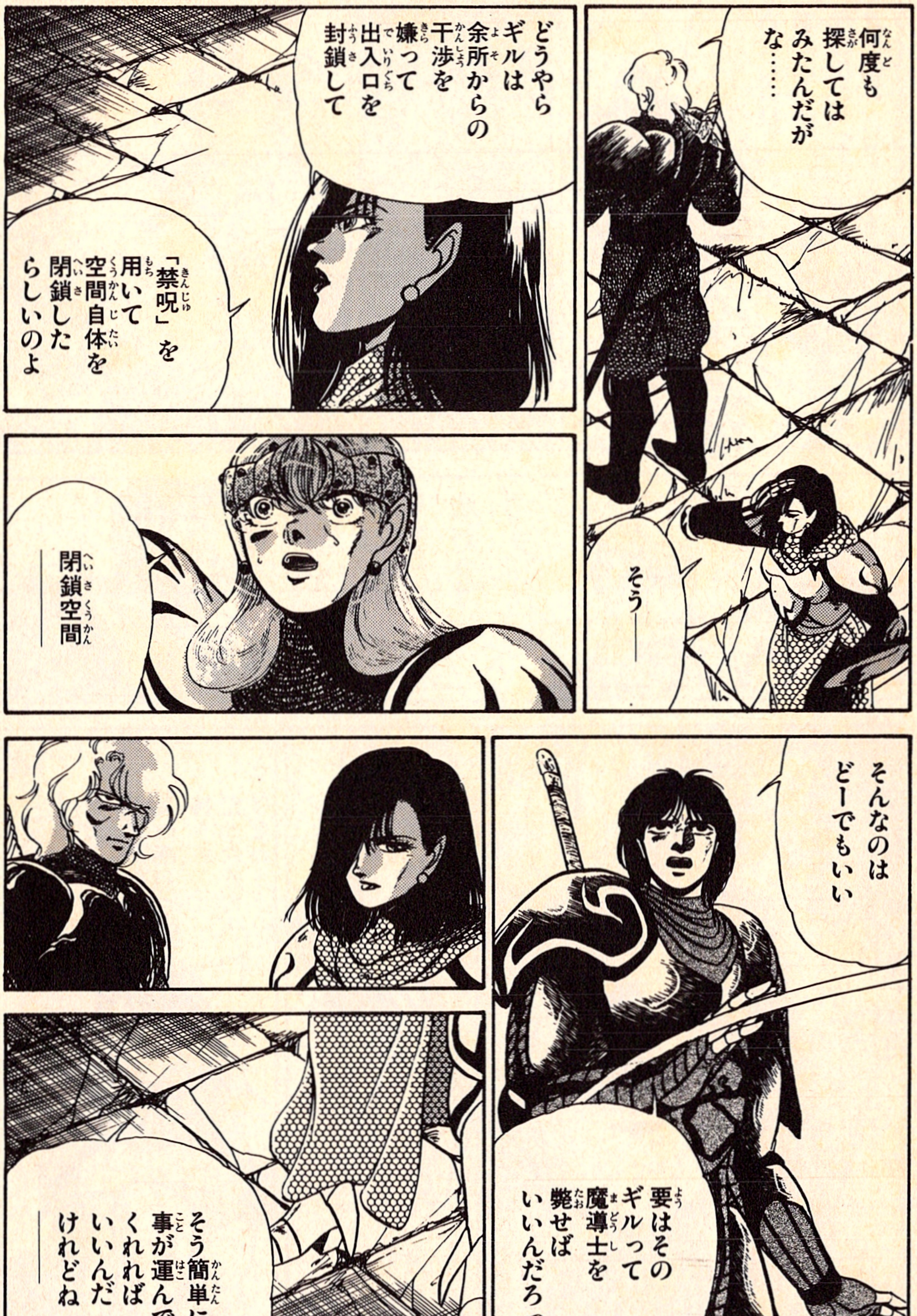

—ん
まあ……
じゃあ
そちらは
そーね
ひとまず
—
話を聴く
ことに
するわ
よかった
—
では まず
—
自己紹介と
いきますか
オレの名は
サンザ
「忍者」だ

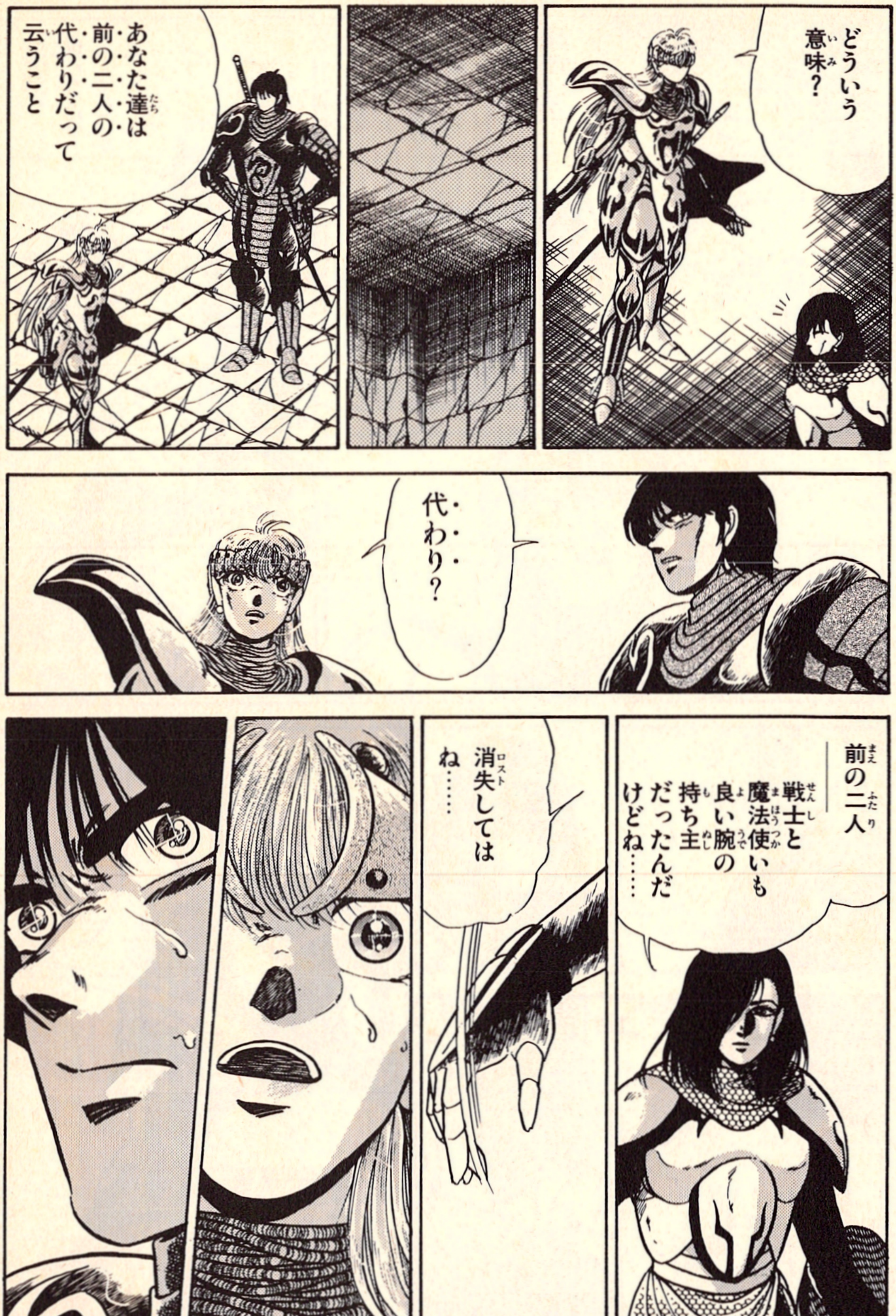

私はシェーラ「ビショップ」
俺はホウライの侍――ショウだ
私の名はルーシィディティリルガミンの将軍――「ロード」よ
ルー イチッ
リルガミンの姫将軍は舌を噛むような名前だな
ホウ
リルガミンの――
どーりで気がつえーわけだぜ



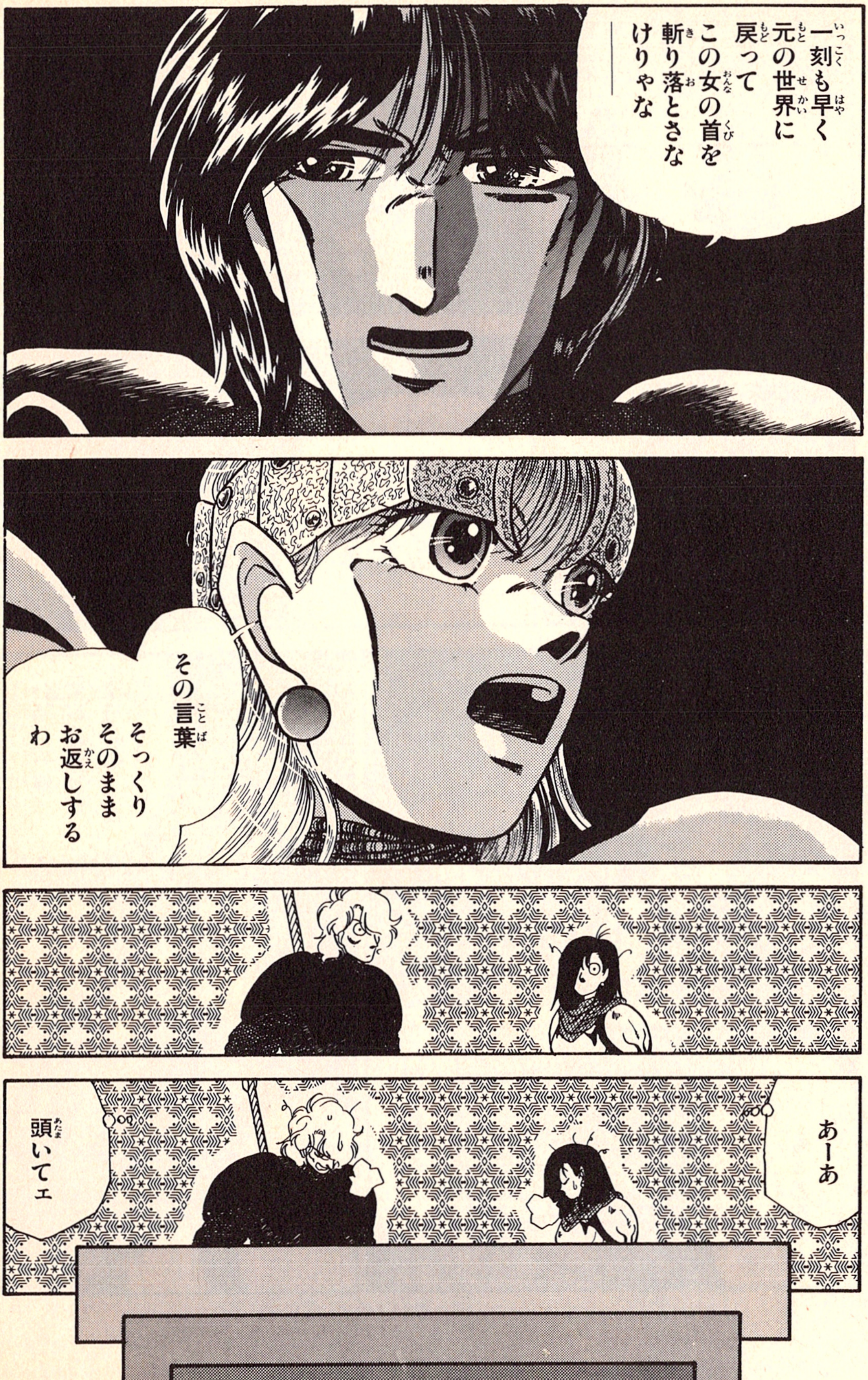
噂に名高い姫将軍様か
これはこれは
そんなのどうでも良いわ
とにかく今私たちがおかれている状況を教えてもらいたいものだわ
さすが姫将軍！転換が早い!!
世辞はいい
ハイハイ
ふうん
まっオレたちも良くは理解していない――


あの――ル何とかにいきなり地上からこの迷宮に召喚された口だからな
ただ解っているのは
ギルって奴を斃さなけりゃ
ここから脱け出せないと云うことだ
何故？脱出できない？出入口は？
ない
そんな！


何度も探してはみたんだがな……
そう——
どうやらギルは余所からの干渉を嫌って出入口を封鎖して
「禁呪」を用いて空間自体を閉鎖したらしいのよ
閉鎖空間
そんなのはどーでもいい
要はそのギルって魔導士を斃せばいいんだろっ
そう簡単に事が運んでくれればいいんだけれどね

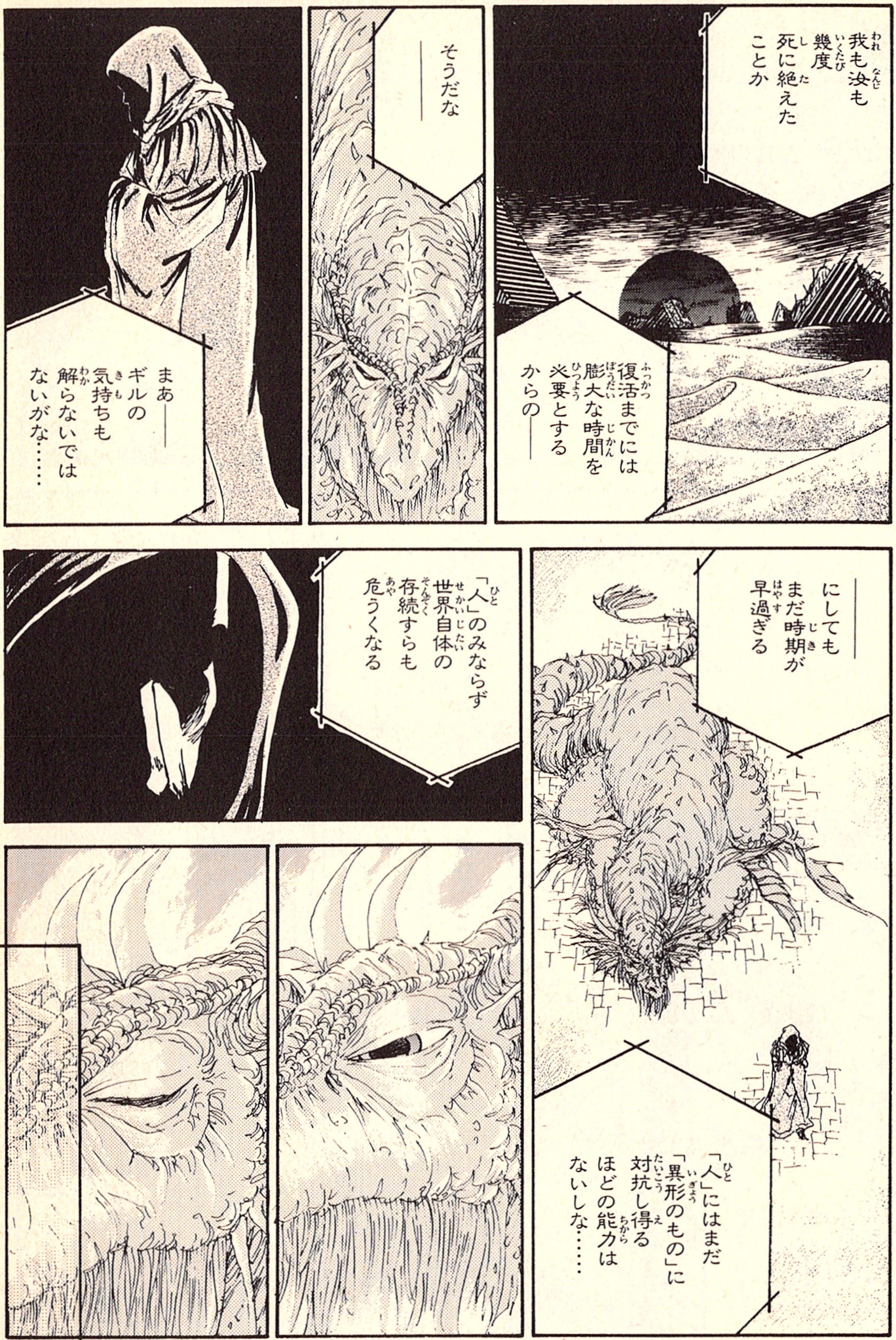

どういう意味？
あなた達は前の二人の代わりだって云うこと
代わり？
前の二人 戦士と魔法使いも良い腕の持ち主だったんだけどね……
消失してはね……


寺院がある訳でなし——
私の「還魂」も寺院の専門僧侶ほどの利き目はないしね
いっ、一体何があるって云うんだ
ここには
知りたいか
もちろん


一刻も早く元の世界に戻ってこの女の首を斬り落とさなけりゃな
その言葉そっくりそのままお返しするわ
あーあ
頭いてェ



どうかな
今度の二人は？
判らぬ
——が
その資質は
優れている
守るべき者が
いなければ
世界もまた
崩壊する
……か



我も汝も
幾度
死に絶えたことか
復活までには
膨大な時間を
必要とするからの――
そうだな――
まあ――
ギルの気持ちも
解らないではないがな……
――にしても
まだ時期が
早過ぎる
「人」のみならず
世界自体の
存続すらも
危うくなる
「人」にはまだ
「異形のもの」に
対抗し得る
ほどの能力は
ないしな……


あの部屋から出てみれば解るって一体何が……
その内に出交わすわ

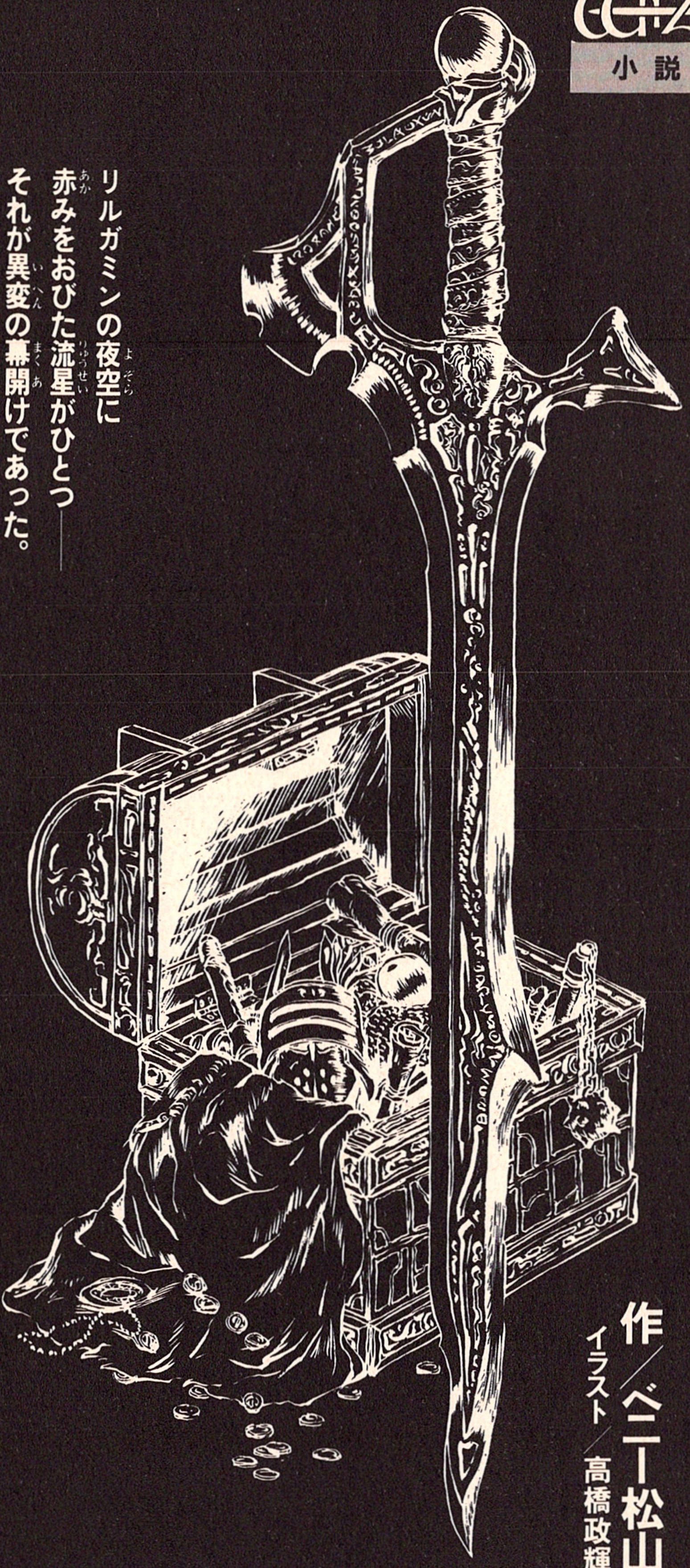


次号(Vol.21 10月20日発売)につづく!!　　**TO BE CONTINUED**

Wizardry II
小説ウィザードリィII

風よ。龍に届いているか
第1回

リルガミンの夜空に
赤みをおびた流星がひとつ——
それが異変の幕開けであった。
「隣り合わせの灰と青春」に続くウィズ小説
第2弾!!華麗なる冒険の旅が再び始まる!!



作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〈序章〉流星

穏やかな夜だった。
丈高い草原の海を、静かに風が渡っていく。
月明かりに照らされ、草が銀色の波のようにうねっている。
雲一つない夜空は、満天に星々が煌めいていた。
凄い数の星であった。澄みきった空から、今にも零れ落ちてきそうに見える。
リルガミン地方の、秋の始まりであった。
草原から、虫の音も聴こえてくる。
と、星が一つ、夜空に流れた。
天頂近くから流れたその星は、次第に赤味を帯びながら草原の上空を落ちていく。
草原の向こうには、夜空に黒く岩山が聳えていた。
流れ星は、その裏側に消えたかに見えた。
一瞬の後、岩山の山頂付近が赤く光った。
虫の音は、止んでいた。
一陣の風が、草の葉を空中に舞い上げる。
それが、異変の幕開けであった。
この夜、多くの者が嘆きの精の泣き声を耳にしたという。

〈第一章〉予兆

空気が、わずかに揺れた。
はっきりとそう感じられるほどではない。微風、とも呼べぬ微かな空気の流れだ。
辺りは漆黒の闇に包まれている。
目の前に己れの掌をかざしてもそれと判らぬ真の暗闇だ。光が全く存在しないため、闇に慣らした目も役には立たない。
その闇の中に、何かが潜んでいる。
空気の乱れは、そいつの身動きが生み出したものなのだ。
もっとも常人に気取られるような動きではない。たとえその姿が見えていても、動いたのかどうか判らぬほどだろう。
用心深い獲物に音もなく忍び寄る、肉食獣特有のしなやかで繊細な動作だ。
だが、俺の研ぎ澄まされた神経はそれを完全に捉えていた。
敵だ。
闘いの始まりだ。
首の後ろの毛がちりちりと逆立つような緊張が疾る。もう幾度となく繰り返してきたにもかかわらず、この張り詰めた感覚は消えることがない。
と同時に、俺の体に流れる血が熱く滾り始めた。
肉の奥底に澱のように沈んでいたものが、闘いの予感に喜悦しているのだ。それは人の中に残された、遠い原初の野生の血なのかも知れない。
再び、空気が動いた。
前よりも動きが大きい。潜んでいたものが身を起こし、ゆっくりと近づきつつあるのだ。
足音はない。そいつは細心の注意を払い、歩を進めているらしい。
それはつまり、相手もこちらの存在に気付いているということだ。そうでなければ、これほどまでに足を忍ばせたりはしない。
しかしそれも確信には至っていないようだ。俺の殺気を本能的に察知

し、警戒しているに過ぎない。
俺は軽く両脚を広げ、不動の姿勢をとった。
そして大きく息を吸い込み、止める。
呼吸によって生じる気配を絶つ一種の隠身法だ。呼吸を止めている間は、俺の気配は一切消え去る。
簡単な隠身だが、このような闇の中では思いの他効果がある。それまで感じていた殺気がいきなり消失するのだ。視覚が奪われているために、相手は十中八九慌て始める。
数秒と経たぬうちに、そいつは俺の術中に落ちた。
雷に似た音が聴こえてきた。
喉の奥から漏れる唸り声だ。
気配を見失い、そいつは威嚇によって俺の所在を確かめようとしているのだ。
だが、それは逆に自分の正確な位置を俺に教える羽目になった。
俺の正面、約10メートルの距離にそいつはいた。足は止まっている。
俺は動かない。
息を止めて一分。
唸り声がゆっくりと近付き始めた。
警戒心を解いてはいないが、むしろ何もいないことを確認するために進んできている。先刻の忍び足ではなく、弾力のある足の裏の肉が硬い石床を踏みしめる音がかすかに響く、そんな歩き方だ。
四ッ足だった。
一歩進むごとに、そいつの警戒心が薄れていくのが感じ取れる。隠身に見事に引っ掛かっているのだ。
獣の嗅覚も、魔法の薬品によって体臭を消している俺には役に立たない。そいつは次第に無防備に、俺に近寄ってくる。
距離が半分以下に詰まった。
俺は懐に手を入れ、小さなガラス瓶を摑んだ。この親指ほどの大きさの瓶は細い鎖につながれ、ペンダントとして俺の首に掛けてある。
4メートル。
3メートル。
距離が縮まるにつれ、そいつの呼気の血生臭さが強まってくる。
2メートル。
しゅうと音を立てて吐き出される息が、俺の顔に生温かく吹きつけられているかに感じられる。
気配は消し続けている。五分間は息を止めることができる俺にとって、ここまで二分足らずの隠身は半分以上の余力を残しているのだ。
そいつは、あと1メートルというところに足を踏み入れようとしていた。
間合は充分。
そいつが、最後の一歩を踏み出した。
その瞬間、俺は懐からガラス瓶を引きずり出した。
青白い光が闇を切り裂く。
瓶を満たしている液体が、その光の源だ。大した明るさではないが、闇に慣れた目には眩ゆいばかりの光を発している。
俺の周囲が照らし上げられた。
石造りの回廊が、俺の前後に伸びていた。
幅、高さともに6メートルほどの巨大な通路。それが俺の今いる場所だ。
そして——。
俺の眼前に、一匹の巨獣が浮かび上がっていた。
虎だ。
人喰い虎と呼ばれる、人の肉の味を覚えた凶獣がそいつの正体だった。
体長2・5メートル、体重は二〇〇キロを優に越えるかという巨体が、俺とわずか1メートルの距離を挟んで対峙しているのだ。
だが、驚いているのは俺ではなく、人喰い虎のほうだった。
匂いも音もなく、気配すら微塵も感じられなかった空間から、突如として奇怪な光が現れたのだ。
俺のほうはこいつが最初の唸り声を発した時から、とっくにその正体に気付いている。全ては読み通りだ。
暗闇の中で開ききっていた虎の丸い瞳孔が、青白い光の前で急速に収縮していく。目に入ってくる光量を調節し、光の正体を視認するためだ。

ここまで、俺が発光瓶を取り出してから十分の一秒にも満たない。
そして俺も、黙って虎の様子を観察していた訳ではなかった。
軽く腰を落とし、上体を右に捻る。
左腕は肘から先で顔をガードするように前方に構え、右腕は肘を後方に引いて脇腹につけている。
人喰い虎の目が俺を捉えるのと、俺が右脚を半歩踏み出したのはほぼ同時だった。
虎が見たのは、一人の人間の男の姿だ。
細身で、背丈は2メートル近い。全身を限りなく黒に近い濃緑色の装束で包んでおり、光に照らされてなお、背後の闇に溶け込むかに見える。
男は、素手だった。武器はおろか、革の防具ひとつ身に帯びてはいない。
その姿を断ち割るように、何かが視界を左右に二分した。
それが、この人喰い虎がこの世で見た最後の光景だった。
俺の右の貫手が、虎の両眼の間に叩き込まれていた。
四本の指は頭骨を突き抜け、ほとんど根元までめり込んでいる。恐らく指先は脳に届いているだろう。
内圧で、眼球は半分飛び出しかかっている。
がくん、と顎が開いた。そこからだらりと長い舌が垂れ下がる。
俺は虎の頭からゆっくりと右掌を引き抜いた。血液と脳漿の、ぬるりとした感触が指先にまとわりつく。
指が抜けた瞬間、虎の体が揺らいだ。
俺の三倍近い重量を持つ巨軀は、そのままどう、と横倒しになった。
即死だった。
いかに強靭な肉体を誇る巨獣といえども、急所を突かれればひとたまりもない。
俺は片膝をついてかがみ込み、まだ温かい屍の腹部の毛皮で右掌にべっとりとついた血を拭った。
拭いながら大きく息を吐く。先刻から今まで、呼吸を止め続けていたのだ。
緊張が徐々に和らいでいく。
完璧な戦いだった。相手に防御する暇さえ与えず、一撃のもとに屠る。
しかも、剣や斧といった武器を使わずにだ。
己れの身ひとつの状態で、危険をできる限り冒さずに敵を倒し、生き残る。
これこそが、長い年月をかけて確立された〝忍者〟の戦闘スタイルなのだ。
俺は立ち上がり、改めて青白く浮かび上がった回廊を見回した。
一体それは、どのようにして造り出されたものなのか。
太古の昔から小規模な火山活動を繰り返してきた岩山の内部に存在する、自然の産物ではありえない洞窟群。それは厚い岩盤に覆われた山中で複雑につながり合い、実に一辺数百メートルにも及ぶフロアが六層も連なる巨大迷宮を形成しているのだ。
ところどころ造山時に溶岩中にたまった巨大な気泡の跡がそのまま洞窟となっているが、それ以外のほとんどは岩を掘り抜いて造られた人為的な地下通路だ。中には下手な宮殿よりも見事な仕上がりの場所もあり、たとえドワーフの鉱夫や石工が千人働きづめになっても、千年かけて完成するかどうかというほどの代物だと聞かされている。
発見されてから十年と経ってはいないが、迷宮自体は相当古い時代から存在していたらしい。それはこれまでに迷宮内で発見された遺留品の数々から明らかになっている。
古めかしい型の鎧や、錆びかけた大剣。中には古代のドワーフ細工の逸品として名高いミスリル製の防具や、もはや製造技術の失われた魔法の品々までもが迷宮の暗がりに転がっているのだ。少なく見積もっても、大災害によって大古の昔に壊滅した超魔法文明以前に、この迷宮は造り上げられていたということになる。
そしてまた、ここはただの廃墟と化していた訳ではなかった。
この近辺には棲息していない筈の大蛇や巨鳥。おぞましい魔法実験の末に生み出された奇怪な化獣。今では遙かな秘境にしか残っていないとされる怪物たち。
それらの魔物が、この迷宮の中には存在しているのだ。



古代の遺品を目当てに入り込もうものなら、その持主と同じ運命を辿る羽目になる人外の魔境だ。

それ故に発見後も、つい一年ほど前までは誰も足を踏み入れようとはしなかった。

だが。

今では数十人の冒険者が日夜、この危険な迷宮の探索に挑んでいる。

かくいう俺も、その冒険者の一人だ。

名をジヴラシアという。

悪の戒律に従う、混じりっけなしの人間族の忍者だ。

能力を示すレベルは13、俗にマスターレベルと呼ばれる域に達している。このレベルというのはその冒険者がどれだけ戦いの場数を踏んできたかを表すもので、マスターともなれば相当な修羅場をくぐっているということになる。普通なら、十数年はかかるレベルだ。

事実、俺はもはや数え切れないほどの実戦を積み重ねてきた。

ただし、この一年の間にだ。

一年前、二十歳の時にこの迷宮に初めてやってきた俺は、基礎修行は積んでいたものの実戦の経験がないレベル1の忍者だった。

戦闘には自信があった。基礎修行とはいえ、幼い頃から地獄の鬼も逃げ出すほどの厳しい訓練を続けてきたのだ。

しかし、訓練と実戦はまるで違っていた。

訓練は、肉体と精神の鍛練が目的だ。命にかかわる難行も、目的はそれまでの自己を超越すること、即ち戦う相手は自分自身だ。

確かに実戦も、それを乗り越えることによって鍛練にはなる。が、それが目的ではない。

実戦の目的とは、生きること。

実戦とは、命のやりとりなのだ。

殺るか、殺られるか。

相手の息の根を止めなければ、自分が息の根を止められることになる。

相手にとっても、それは同じだ。それこそ死力を尽くして、俺を倒そうとする。

修行における仮想敵——これまでの自分は、常に新しい自分によって打ち負かされるべき存在だ。

だが実戦では、俺より戦闘力の低い相手であっても必ず倒されるべき存在ではないのだ。いつでも、倒されるのが自分であるという可能性がある。

自分の命が危険に晒されることによる極度の緊張感。敵を倒して己れの生命を克ち取った時、このプレッシャーは修羅場をくぐった経験として自分の中に刻み込まれる。

それこそが、実戦での能力の成長を促す血肉となるのだ。

訓練では決して得ることのできない、生き残る力だ。

俺はそのことを、初めての実戦で身をもって知った。

幾度となく練習した筈の技術が何一つ出てこない。剣を振ることすらままならなかった。

実戦の恐怖と緊張が、俺の軀の自由を奪っていたのだ。

ようやく敵を倒した時には、俺もくたばる寸前だった。どうやって相手を殺したのか、何も覚えていない。

その時、俺は悟った。

実力の伴わぬ技術など、何の役にも立たないということをだ。

訓練の中で培った技術を実戦の中で生かせるようになって初めて、それを習得したといえるのだ。

以来一年間、俺は狂ったように迷宮での実戦に励んだ。

パーティを組み、仲間たちとともに迷宮を探索する。行手を阻む魔物を、力を合わせて蹴散らした。

時には今日のように単身で迷宮に乗り込む。極めて危険な行為だが、そこから生まれる緊張感がより早く実戦の勘を養うのだ。

何故、そうまでするのか。

現在俺や、その他の冒険者たちは、ある任務を果たすために迷宮の探索を続けている。

迷宮で待ち受けている戦いを勝ち抜くには、実戦の経験は大いに役に立つだろう。

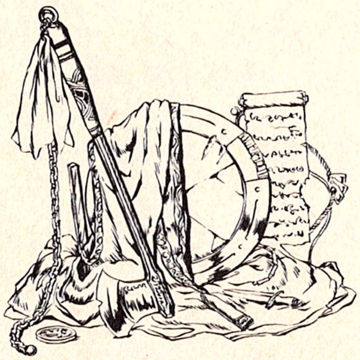
WIZARDRY Ⅱ

風よ。龍に届いているか

だが、その任務もいずれは終わる。迷宮に入る必要はなくなるのだ。
その時、冒険者の、忍者としてのレベルが一体何の役に立つのだろうか。
素手で人を殺せる技術を磨くことで、自分はどうするつもりなのか。
判らない。
判らないが、俺は戦い続けている。敢えて危険な道を選んでいるのだ。
冷たくなり始めた虎の屍を見下ろしながら、俺はいつしかそんな考えに耽っていた。
低い地響きが、俺を我に返した。
地震だ。
迷宮全体が微かに震えている。

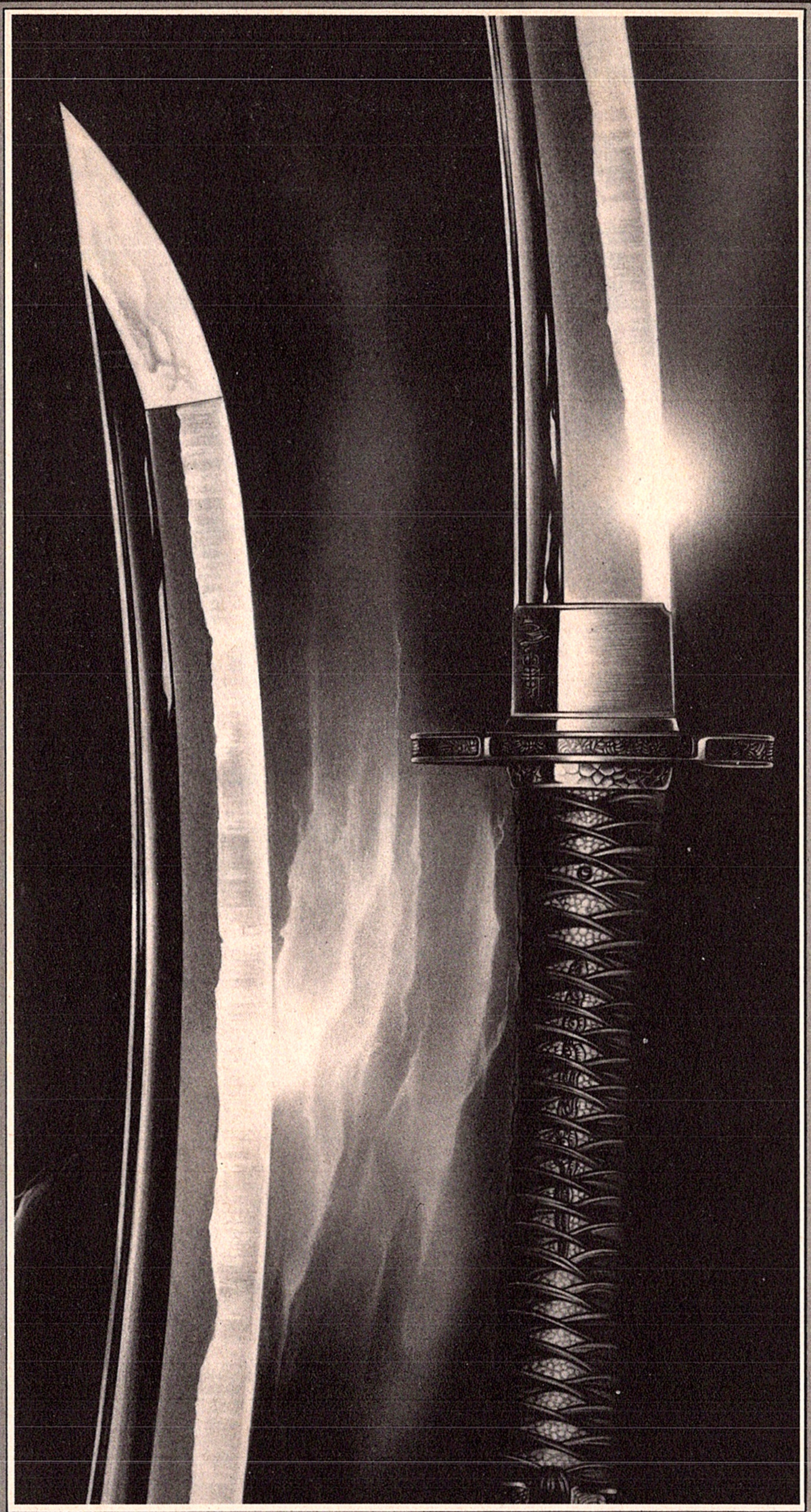
「またか……」
俺は口に出して呟いた。
この1週間というもの、迷宮近辺では同様の微震が相次いで起こっている。俺が今日迷宮に入って五時間ほど経つが、その間すでに十回以上の震動があった。
街の噂では、この山の火山活動が再び活発になってきているという話だった。この群発地震は、噴火の起こる前触れであるらしい。
どれほどの信憑性があるのか知らないが、いずれにせよ気分のいい話ではない。その物騒な山の中に、俺は潜っているのだ。
迷宮が崩れようものなら、いくらマスターレベルの忍者でもひとたまりもない。
一分足らずで地鳴りは収まった。
そろそろ外は日没が近づいてきた頃だろう。
潮時だ。現在位置から迷宮の入口に戻るまで、運良く魔物に出会わなかったとしても小一時間はかかる。
俺は踵を返した。
その時、俺は背後に奇妙な気配を感じたような気がした。
腰をかがめ、素早く振り向く。
前と同じ、奥深い闇が伸びていた。
俺は瓶の灯りをかざし、目を凝らした。
耳を澄まし、空気の流れを肌で読む。
しかし、何も感じられなかった。どうやら気のせいだったらしい。
俺は軀を戻し、きた道を戻り始めた。
この時あと十秒待っていたなら、俺は光の届かぬ闇の中で再び動き出したものに気付いていたかも知れなかった。
俺が立ち去った後、暗闇に包まれた回廊に低く静かな詠唱が響き渡った。
それはこれから始まる死闘の、確かな予兆だった。

（次号につづく）



あとがき

ベニー松山です。久し振り。
今年は8月の末に、ふらりとバイクで旅行に出かけてみた。
高速道路は使わない。移動が目的ではなく、その土地その土地を見たかったからだ。
東京を出発して新潟に出、東北を回ってからフェリーで北海道へ。思ったよりずっと長い旅になってしまった。
何しろこのあとがきを書いている9月13日現在、まだ礼文島にいるのである。
『風よ。龍に届いているか』の第一回は、旭川から宅急便で送ったものだ。
まだしばらくは、帰りそうにない。
どうやら、次回も旅先で書き上げることになりそうである。
今後とも、よろしく。



●コミック版
ウィザードリィ外伝
——ギルの迷宮
作／石垣環

●小説ウィザードリィII
風よ。龍に届いているか
作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

▶コミック版ウィザードリィ外伝・ギルの迷宮は反対ページ(P84)からお読み下さい。